

日本固有の思想あり

日本はこれまで西欧の思想を有難がり日本固有の思想をあまりに軽視しまた無視してきた。物まねはうまいが独自の思想などないと断言する人までいる。こんな立派な国が、こんな優れた民族が独自の思想を持たないと思わないのか。人間の社会は思想を土台に成り立つてくるのに。

吉村昭氏にノーベル文学賞を

尊敬する作家吉村昭が（…と書き初めて思考が飛んだ）。

余談だがノーベル文学賞の選考に疑問を持っている。昨年はアメリカのミュージシャン、ポップ・デイルンが受賞した。詩人としての賞が評価されたのだが、この受賞は近年の文学賞では最も妥当な選考だと思ふ。

かつて日本の出版社の世界文学全集はほとんどノーベル文学賞受賞者の作品であった。今から五十年前（一九六一）の話である。それ以降の文学賞受賞者は名前を知らないし、作品を読んだこともない。私の年齢のせいだけではない。私が出ているが、冒険活劇物や探訪記事、奇跡の出来事などがかりでサラッと見ただけで読む気がしない。

選考者の力量が落ちたのか。一説によれば欧米諸国で翻訳されている本が優先的に対象になるそうである。これはうなずける。選考者は日本語は読めないから自国語に訳された日本の作家の本を読む。あるいは映画やテレビドラマを見て知る。こうして川端康成（一九六八）、大江健三郎（一九九四）が選ばれ、今は毎年村上春樹が候補に上がっている。

川端の小説は大きく展開する筋もつと文学賞にふさわしい人が

いるだろう。たとえば吉村昭。亡くなつてしまつたが生存中に受賞させたかった。

吉村の「戦艦武蔵」「海の史劇」などの戦史小説、それに続く「ポーツマス」などの歴史小説は皆古典としてずっと読み継がれる作品である。

川端、大江、村上ほど欧米で翻訳出版されていなかった。荒田の言つたとおり吉村が受賞したら日本中が心から祝福したに違いない。

ここからは余談の余談である。タイム技研の丹羽公明会長が言つていた。「韓国の学者や研究者は外国の文献や論文を読むために外国語を勉強しなければならぬ。たとえば日本の研究論文を調べるために日本語を勉強する。語

本題に戻る。吉村昭がこう書いている。「思想とよべるものが日本にあるとして、それはすべて外来のもので、固有の思想はない。思想のきざす土壌が、貧弱なのだ」

文章は、この貧弱な土壌が「敗戦」によって肥沃になる養分を得て、日本にようやく思想らしいものが生まれる得がたい機会が訪れたと言える、と期待していたが、思想らしきものきざす気配はきわめて薄いと続いている。

経宮管理講座 341 染谷和巳

もし読んでいたなら「吉村さん、日本にはルソーやマルクス、ケインズに匹敵する思想家が二人もいるんですよ。近代の日本の資本主義発展の礎となった思想です。この二人がいなければ今の経済大国日本はありません。ここ三百年に亘つて日本人の心に深く強い影響を与えてきた思想です」と論じたであろう。

明治政府は「江戸時代の否定」から出発した。徳川幕府は悪であり、創始者家康はざる賢いたぬきオヤジであり、大老井伊直弼は大悪人、二百六十年間の長きにわたる民は悪政にあえぎ、つねに貧しく冷害や旱魃で米がとれないと飢えて百姓一揆を起した。江戸時代は暗黒の時代であり、文化は低かった。よつて歴史に名を残す人物は現れず、英雄といえ幕府の弓を引いた大石蔵之助くらいしかいなかった。

敗戦後アメリカは日本の戦前の教育を全否定し、また明治以降の天皇中心の政体をぶちこわした。

明治以降、西洋かぶれの学者たちが、また敗戦後の大学のマルクス経済学者たちが、日本の土着の思想を無視した。吉村昭と同じように日本には思想も独自の思想家も全くないかのように振舞い発言した。

哲学は独特な専門用語を駆使した文章で成り立っている。一度読んでみただけでは理解できず何度も読み直す。難解であることを有難がる。文章の解釈に終始し、「思考を深める」段階に至ることはない。それに比べ単なる戦国武士の鈴木正三や呉服屋の番頭石田梅岩の

忠義の武士道は自由平等の民主主義に反すると禁止し、一時は時代劇の映画の製作まで禁じた。江戸時代の解禁と正当な評価はアメリカによる占領が終わる昭和二十六年（一九五二）を待たねばならなかった。

思想のきざす土壌が貧弱だと

偉大な二人の思想家に注目！

文章は、読み書きができる商人や大工、かじやなど誰でもたやすく理解できる。実生活に密着しており、己れの毎日と照らし合わせながら読むことができる。あまりに当たり前で庶民的で解りやすい思想なので、学者には有難みがない。「こんなものが一流の思想のほすがない」と脇にどけて忘れた。